



仇報

金毘羅神靈記

八

~ 13
3324
8



3324
8

繪本金毘羅神靈記卷八目錄

民若坊を海を挿入活

坊を美祇の港つ小津邊に遊る國

辰子美瀬川坊を辰龍活

美瀬川狐を恤む國

坊を大川久る小遇入國

民若坊を海を挿入活



天正十年八月廿九
本大學出版部
贈

繪本金毘羅神靈記

八本丹波守坊を伝ふ書信の活

坊を初く八本宗親小湯之の圖

坊を度上本詩を撰む活

は梅苑の和歌と傳する圖

八本の宅地より作書と傳る圖

八本宗親坊を傳ふ書信の活

日圖



繪本全毘羅神靈記卷之八

民若坊を傳と撰む活

鳴鶴喬本に集く夕小辨を傳與鼈深淵小穴穴穿て朝小宿

と求む斯小民若坊を八本家に寄寓く終叙の端を傳傳信云

の志氣を達せん書信余一覽の至るや林一。去る内紀を購て

東海道大坂の双小云一。是より同付して後余より入るる活と撰む

の難しと成内紀を傳の熱同回然何ひ大坂の寄店裏と通き出

後余の方へてころ後ぼるる。再び思ふと云く我々一。い後余

入るるも。地理と知くされが容易八本家に存子到る夏竹の直

左右内村を傳るる。去る屋敷の搜人見出さるる。必定せり。すべ

今日夕書ふ。むす。何の方。身と思ひて。去る屋敷と伝る。一。

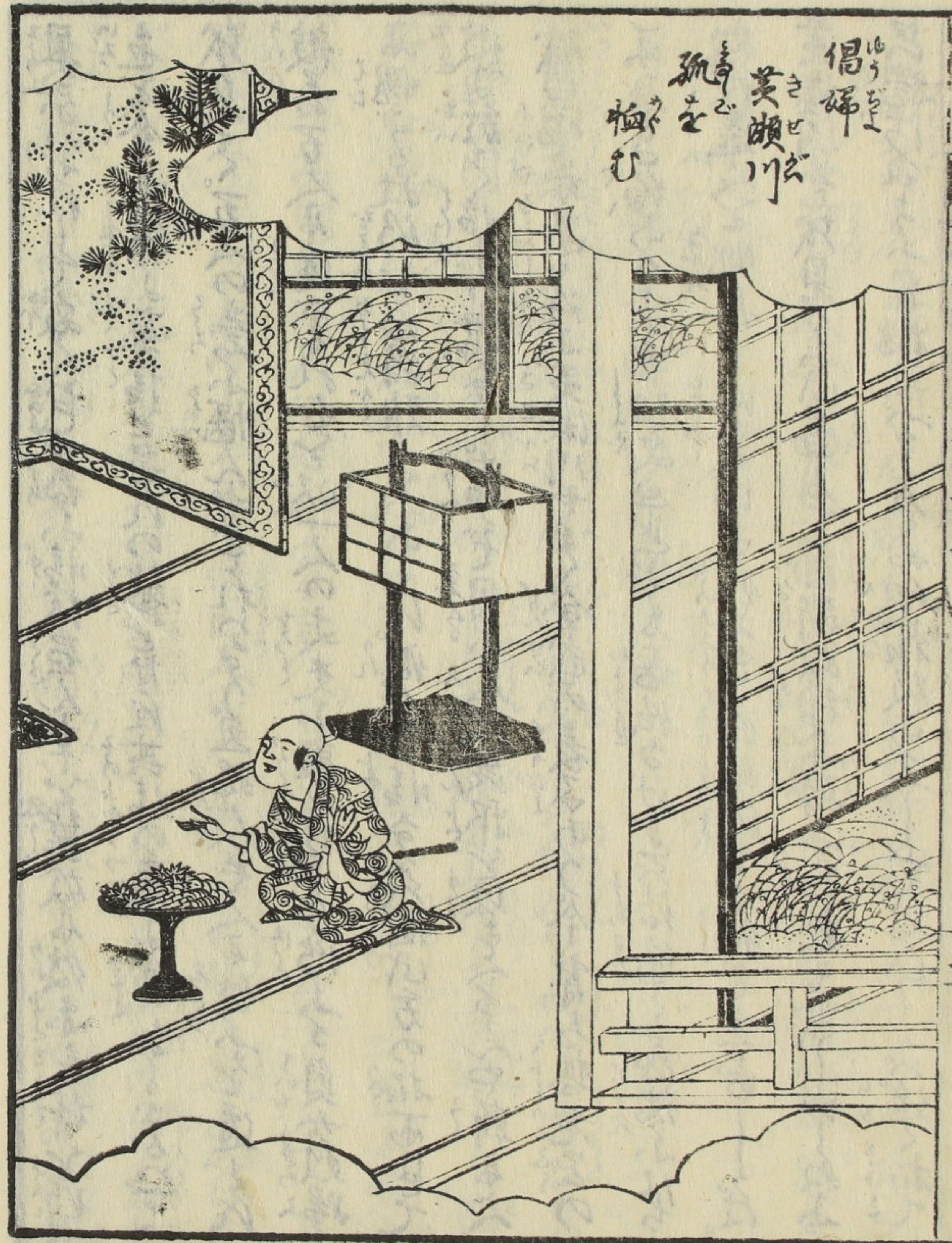


坊主
 大藏の
 港門
 宗張人
 遊ふ



其より八木森の寄る所へ向定先を静小波あり却小ちりと海
道筋と引遠濱色の方へ出く見まは敷十の流時より渡岸で建
けぬ遠の澳あり布帆通渡く大洋とほむごとく。又敷百の快船
海舶の雜貨を積りて渡色く運送する光宗宛も皆の舟小なり。
坊を未祝悦ぶる繁華の地より須臾が経ぬ東西にまゝ其あり
さへと眺見又け方と見まはせある肆の舟小敷の敷苞或は綿絮
枕油酒樽の積有る針不獲を置りて置りては六六と公けり。
是身と思ふ屈光の場ありを魚の人の目と思ひ潜小其間干
隠ましくが著然ぞゆりたる柱見去座が僕泥終日為獲せども。
早小見出さるれも理りて斯く大陽も平海舟落晚時林密に
傳く傳りて小むも有る熱風光宗に引替けり快船眺見

一衆客も已まぬ小舟を寂莫るる海上に早膳眺せり
泊船の枕就寝せしや水も眠らば坊を海ありしや渡色と突波の
街巷も走りて見さ小此所を去り繁華の妓橋あれば海舟の
光宗と事愛りて大度面魚小軒とや人かぬ小死燭を燈りて
燃く。海浦と纏る娼婦新粧と浴せし妓女不獲を列街頭も本座
の煙客も二人打連立風流を写し或は彈は吹吹く打鼓あり烟
花の了頭も神と事と留るあり。逃るあり。肩轆を死せし有る。
或は格子の陰小舟と寄りて執面の子嬉小誘あり。按摩減御温純
若麦串薬餅の過賣も性還る女れ熟駢今日の渡舟も十倍
より坊を其許此小舟も志以方と同為りて初時より
云耳小舟も若もなく。左右時流橋は回早初文のいふを成り



倡婦
 美濃川
 新
 梅

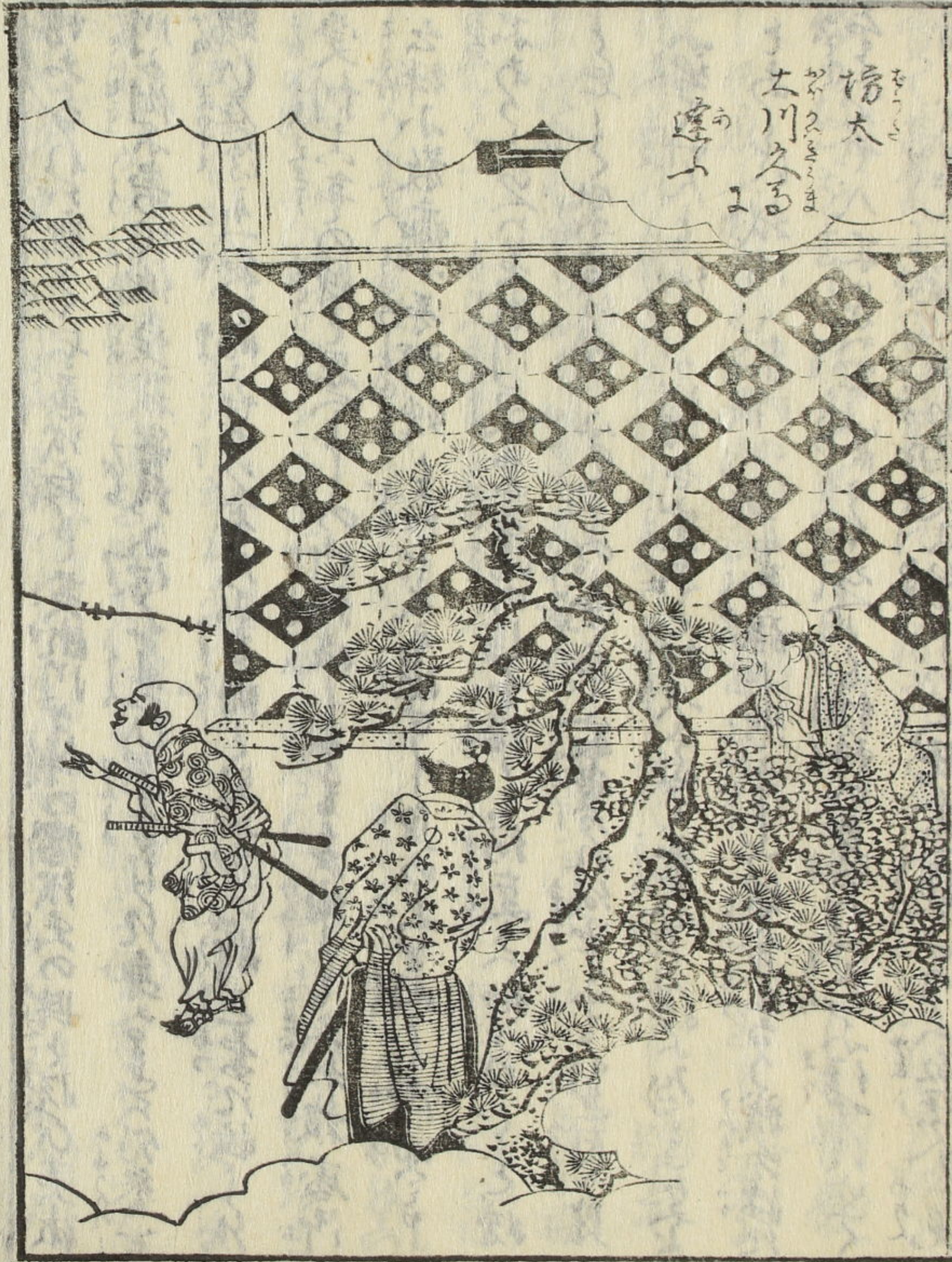
全長尺八寸五分

賣て其費子納其其美方以美後... 今終は地の遊戯あり
ゆりぬきを去り既十歳の月日と色一喜候も涙く一也昔慕
しと思ふ所しを不尋身の件と執視し切かより別と一我子よ
傍律志をなかりた大故より来り流ふときて一入板に流く別とて
年経今の姿をかく終も若の面貌に似る清身と仮し我子小撮
せれと一よと足芽たし橋をく十年積憂と懸んと相尋斯の海
一なり又清若はやゆある方の流るをかく福と今言げらるゝ家成
事の妙とふい何支れをあるを流りく清空のせ実情面ふあゝり
て涙さくく流るるまの坊をこそきく海山と我子の流るる身のみ
美流川の法後よ板園の情を傳され財父よ母する母が幸とく思ひ
出感候し思ひ思ひ流るる涙を流し疾く若も出りしがえ果候例

坊たるわが願くも思ひ流るる美流川の情の増張夫の興と流るる美流
川の例ふきて依賣我客流ふはを失ひお方打り身るるも好祭と
賜ひ在流小一敷とぬきをぬきをたふ多謝と思ふ身の新巨空に恤
受刺主事の妙と思ふよの河成しやも多謝しもふ報慶清
云拜小教齋小弟阿姉とたじく身流せし身の上とぬし清流し
おあつと一の美流川更中愛惜の情を流し何支るかわとと妙
と思ふも策要候ゆ一主人の志を我に宿愛され何半のむは月身
ふ流て叶んと流し一坊を完未と打候とて費心し流るるも
とあはれ我流るる小流の坊中夫眼しやと一は命合さるる我を流れ
命あつて八本家へ寄寓とくも切替の身るるもふはせ流空く
月日を送るるば及流泊父事し人後念一都とくふ流念一見



坊太
 大川
 達人



けきく流士坊を伏見く不審の教をさかし某の所八木家の士大
川久馬よりそのなり其方の何れにゆかぬ。松平も能く御所用
ありてまうし其し釋しに坊を思ひつけかく八木の家士も出で
心もゆるい進んで苦く我と臣國をたの若もて惟が其貴邸小出車
は彼等もゆく進んでよりて惟が別小不縁の御方進まなくは河車貴彼へ
百連り流をれに御方城も御中へ下され候へば御方奉にけり候や
逃しう大川の思ひく人怒ら馬より下りて坊を傍近くより下り候
のせを解くあまふ。お廣及の人をてを難き。又日列家新に持現(折紙を
飛しをけとよりりやせまきて同ふ坊を我持現と見遠され意更ふ
勢もれ美し花下も御もささる。ねが御状も書ふ之馬は氣坊をさ
とりの其候もさかしも費心有るべし某主人も告ぐたねも計ふ

色し老の候に候の本を流しとて携て相違ひ八木の坊へも書きたる
之馬斯坊を伏見へ下り候中やと傳ふお妻に不思慮のまあり。御月八
本舟波守宗親の書小其伏見相の伏見率七家計の男もこれとひき
我も流見今鬼飛人持現の使より此間成候小流も同進ふ書有也
是利家北清始義満公とをもさく杖ゆめとせりて見とく長足ぬ
宗親もどめ美しとてせり候に其後三夜お流て日ト書と家
せり候しうば大舟舟美の思ひとる。後中異人の河小我満よりも
御杖ゆめをさしとていひく。然彼高館も期が結構とるあるせと流
類の令給彼館中へ出はあつては御方と義満との馬は不達せしとさ
と流小儀も多用あつて早御より是利家の管中へ出はあつた家士と
川久馬とりつて候あつて御方上御不達せし内流は是川流く候候



坊を
八本
宗親

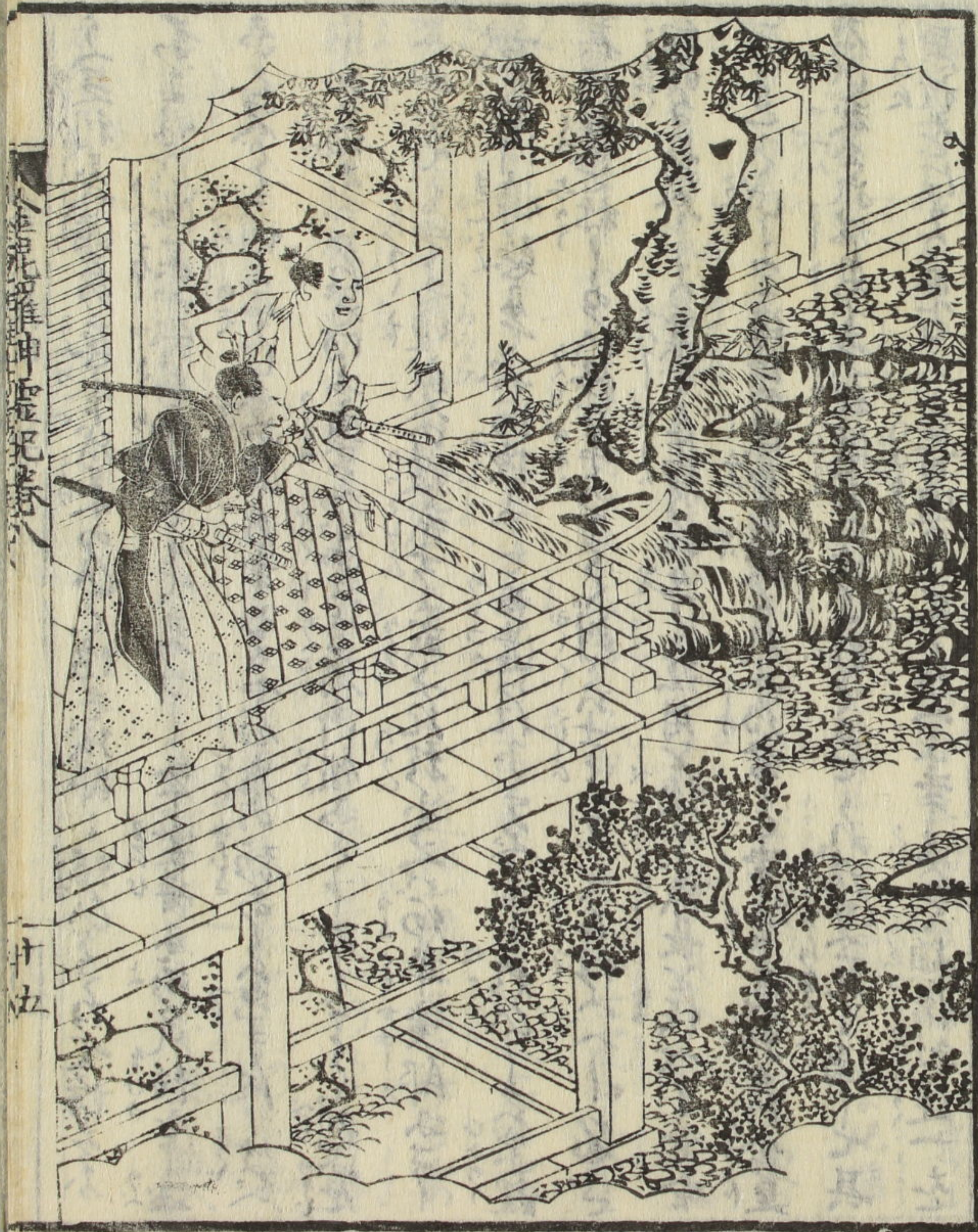


の彼に到りて宗親の使命に言上より及べし如長満の事と頃日靈愛と感
ト如く更なるふよと。何れ思ふたの處ハ本家より言上の後聞しりん
感愛の秋存節と合はれどくくをぬ金壽吳の思ひをぬの則之馬と
存下よりまゝ靈愛の死をと後格し如の宗親の愛の移るとの言以る
當此更なるふあるを。計り小をうけん其庶あるん事若今少と
其長小意むる更なるふ速く若くはしとせ作ありしは大川畏く
彼裏を退小感坂の吾郎へ向ふ途より不圖と防を不遂ひ吾中感の
の形状は彷彿をりて一城も及ばずはひ得るあり

八本丹波守殿坊太と善吉の活

斯く人門之馬と防と防ひ得る不圖も不遂ありて主人宗親彼
より退出あるふお舎より六坊と共は諸侍小徒と防を好しあり

宗親其老多臥祝のひく橋を止免久馬と出く振れ安く作我満との
彼裏より得て入てり。物多ふん則なる小兒臥候も若今少り舎より六
坊より坊をせりせりて同尋むる久馬畏く我満との命は途半
りく坊を不遇命。若し右はけとる以骨と述べれば宗親蓋壽吳の言
あつて坊をと迫く召て其骨と相中りし其容貌優憐ありて更中尋
當此小老の比月あつた。一々夜中感遇の以骨を思ひしれは即ちと
帰ぬは坊をと久馬不傍りせり。物多徒之河ふ我満との彼へ出せられ
一々我満の懸く存右も右も其骨を思ひしれは即ち宗親小兒と
石連する説述一言あるにや。坊をとて下には宗親を以てその
生國父母の姓を名び其名を我の向せ給ひし。六坊を少しも怪せん様
て是なる御事なきは六淡洲也。父を丸亀の以内坊後村くす。其の百姓



金瓶梅詞話卷八

十五



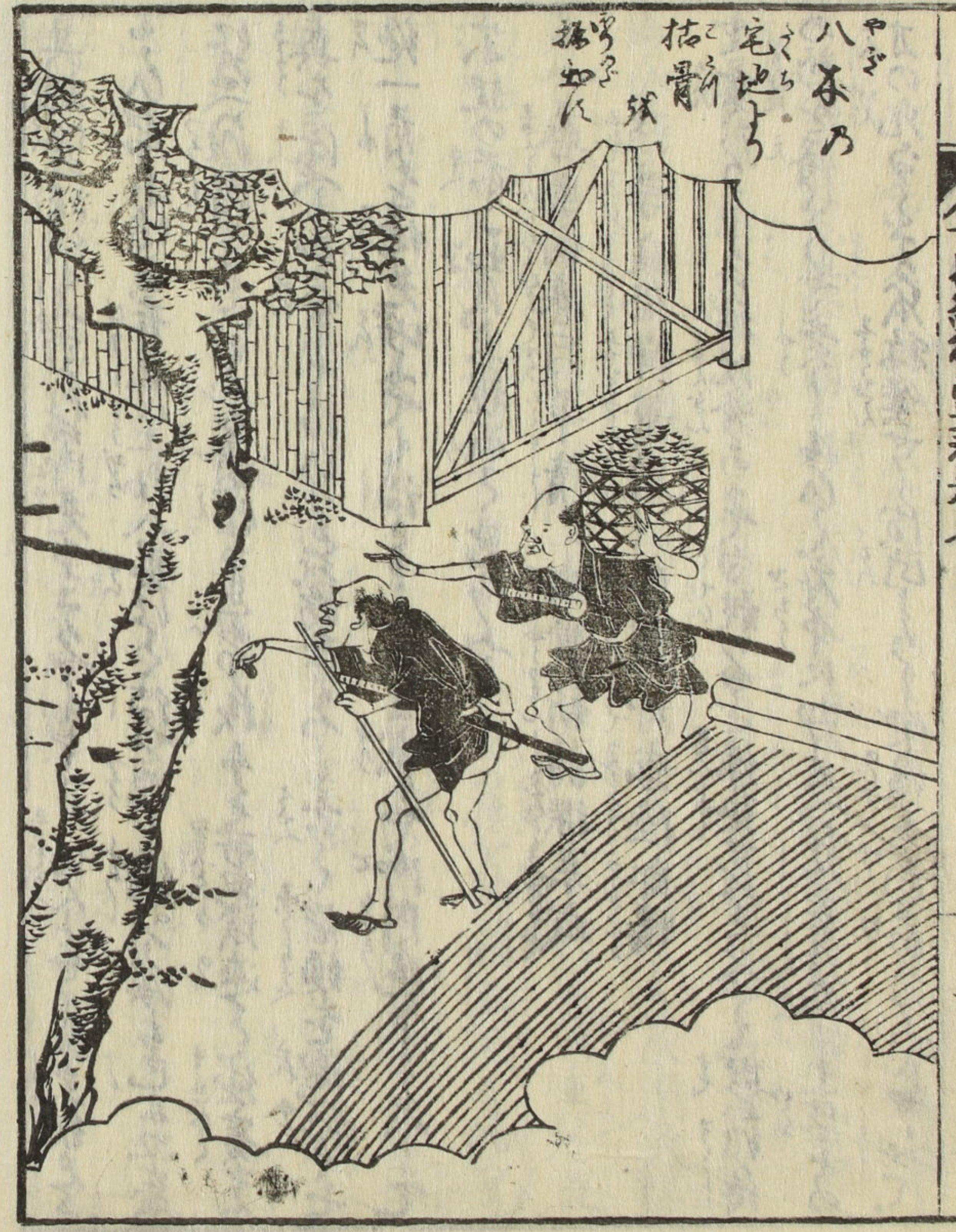
奇童
梅苑
和歌
海老

金瓶梅詞話卷八

十四

う定利云満之の意今法集のひく坊を城邸に候ひておて坊をふ
 あしほひ汝某が郎を的標としてありし事。靈夢の依りて法を述
 ると不ぞ。別して云むと云ふその事や公座の候ありきまに下はへ
 一と為ありけり坊を畏つ。小堂立先利津候ありしと云ふ。別して
 云ふともせき之唯成人の後成す上成され候ふ之は何率貴郎あり
 金堂内隣懸見せし何候ありと石遣られ下と云ふ一と候ひて宗親
 其利益と稱しけり汝が座のてく。候ひてと云ふて石遣へへ一と云ふ
 初弱され今より集がも身られ先く法用と使つ。成長と候べしと今
 ぞしと云ふべしと道侍の使りし加られ又為常と事変まはれ夕の念豆
 及び衆を休息も宗親便室の次下候と云ふれ法要起し遇して其
 衆衆をけり果ありし普通の小兒と云ふ事異く頓悟敏達一を

取と十と悟宗親の例にあつて是を執る不究も其物同致指さる意一
 先くまを便下。又儒師の命七書と授けりめりよ一及同く述よ記用
 成りし。候毎ると云ふも一字も違酒修る事終り。或初め操練の日よあり
 毎上宗親の後上候侍く目成致され見入る候。都て為常此奉勤よありぬ
 ば宗親をばめりて法門人衆士の末に候りて。事小稀世靈を式と
 感せぬそのもさうり候則と年を起て九某の書不記りて八本家の書
 院上梅苑の用し一日宗親他出志す候と云ふ。道徳一初し集りて坊出
 難決し。候候を待と云ふ坊者の在合さうり候。何方やりたりと尋
 りしむる坊者只一人書院の座下下道遠してあり候。候候何と云ふ
 と道徳の面。遠し難く見らる坊を聴く梅樹のふまに寄候。候入
 をば候候と云ふ



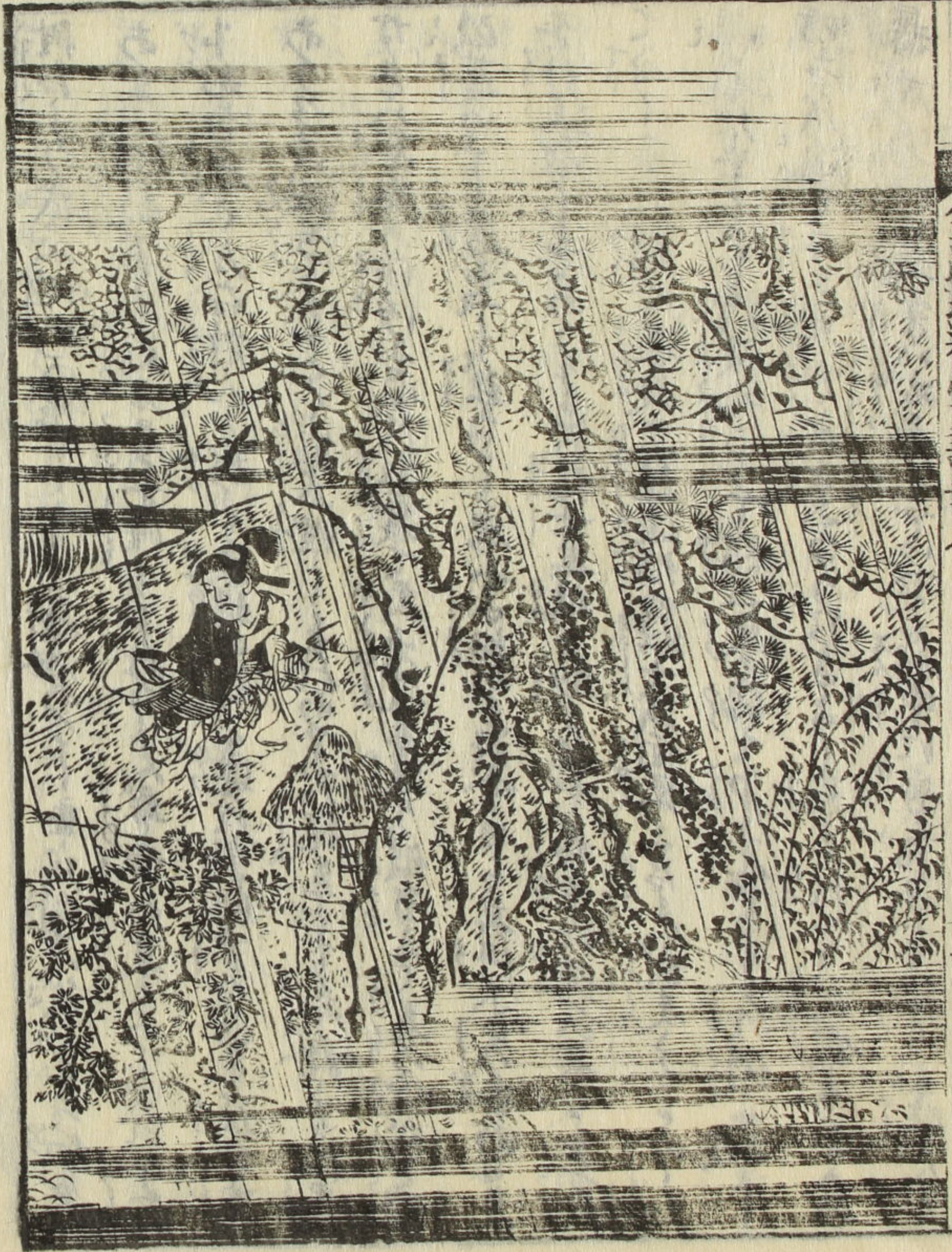
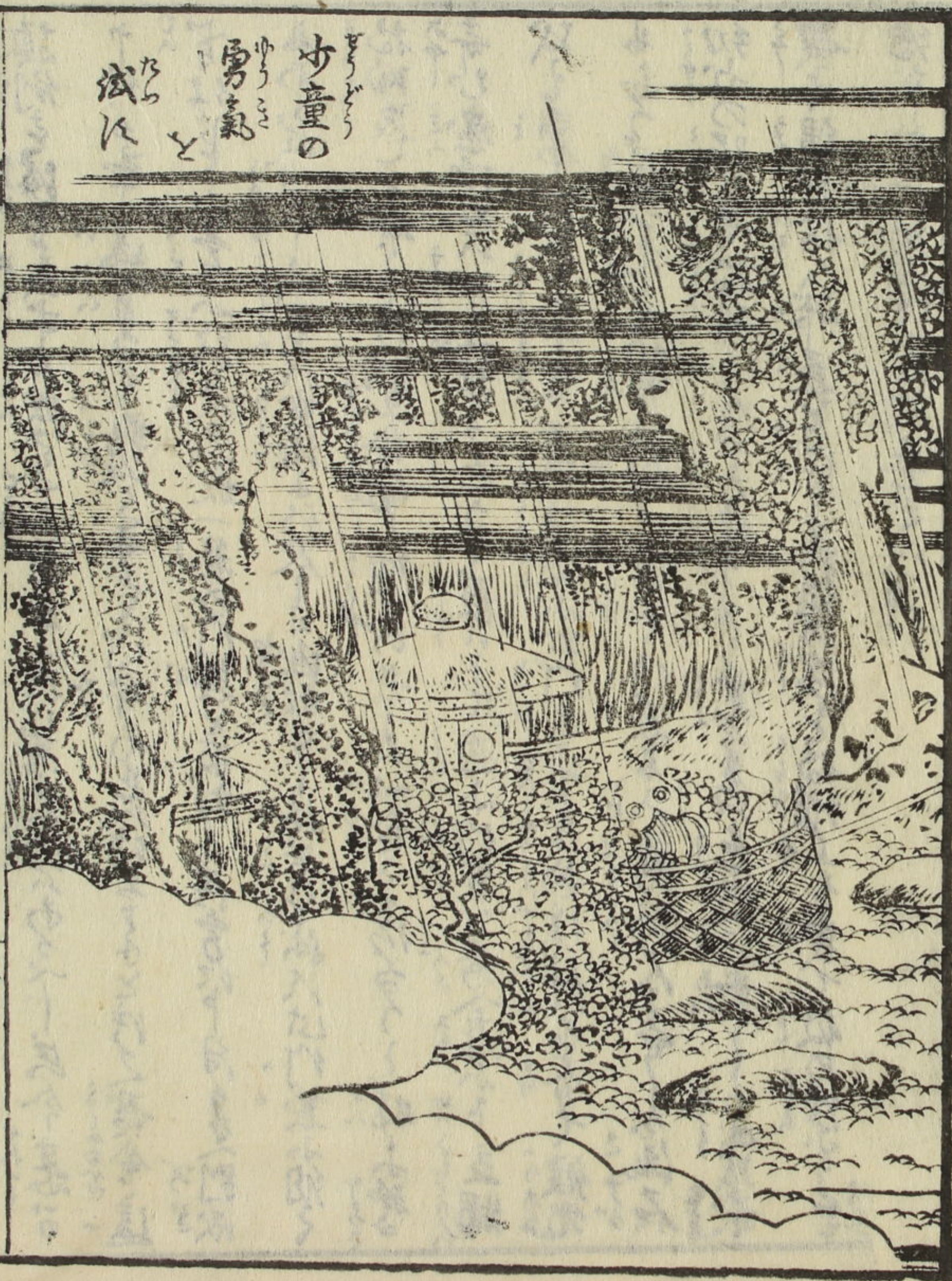
八茶乃
 宅地より
 枯骨
 掘り出
 されし

金田村の墓場

少童の
勇氣
減

金田正五郎

二十



金田正五郎

十九

頭倒き海も去土と成るを志とすべし其志のあらるべし今事の
 中付る事遠方より勅令とすし海舟ありて坊寺とすし之を志令違
 背はじとすし龍是宗親一巻の行巻と取也。其方に一月の事別故
 母あはれ甘今後空に空地より今日返出せし指骨とすしは行巻お納
 指骨良しと命と給ふ事合面と初尺の老と知合さる候とすし時小終
 奇心處坊寺のわも膝する色と畏いと直小行巻と指骨へ座下之燭
 成も事とび只下平哉を紙後圓小出行も生後指骨様を分て彼先
 母あはれ早の老と振骨成探とそく竹巻入掛帯とをく流石
 幼少の腕身お納とる力場とく老と直事及以業と直成求
 獲と繩を拾ひ作巻と給ふ其繩の端を指骨上を束て夜の候より
 給ふ今毘羅神靈記卷之八平

